

主 題：わが神、どうして？

聖書箇所：詩篇22篇 1-21節

テーマ：苦しみの中で神様に信頼すること/イエス・キリストの十字架での苦しみを覚えること

今朝、皆さんとともに学びたいみことばは詩篇22篇です。聖書をお持ちの方はどうぞお開きください。内容に入って行く前に、まずいつものようにみことばをお読みします。

詩篇22篇 指揮者のために。「暁の雌鹿」の調べに合わせて。ダビデの賛歌

「1 わが神、わが神。どうして、私をお見捨てになったのですか。遠く離れて私をお救いにならないのですか。私のうめきのことばにも。2 わが神。昼、私は呼びます。しかし、あなたはお答えになりません。夜も、私は黙っていられません。3 けれども、あなたは聖であられ、イスラエルの賛美を住まいとしておられます。4 私たちの先祖は、あなたに信頼しました。彼らは信頼し、あなたは彼らを助け出されました。5 彼らはあなたに叫び、彼らは助け出されました。彼らはあなたに信頼し、彼らは恥を見ませんでした。6 しかし、私は虫けらです。人間ではありません。人のそしり、民のさげすみです。7 私を見る者はみな、私をあざけります。彼らは口をとがらせ、頭を振ります。8 「【主】に身を任せよ。彼が助け出したらよい。彼に救い出させよ。彼のお気に入りなのだから。」9 しかし、あなたは私を母の胎から取り出した方。母の乳房に抛り頼ませた方。10 生まれる前から、私はあなたに、ゆだねられました。母の胎内にいた時から、あなたはわたしの神です。11 どうか、遠く離れないでください。苦しみが近づいており、助ける者がいないのです。12 数多い雄牛が、私を取り囲み、パシヤンの強いものが、私を囲みました。13 彼らは私に向かって、その口を開きました。引き裂き、ほえたける獅子のように。14 私は、水のように注ぎ出され、私の骨々はみな、はずれました。私の心は、ろうのようになり、私の内で溶けました。15 私の力は、土器のかげらのように、かわききり、私の舌は、上あごにくっついていきます。あなたは私を死のちりの上に置かれます。16 犬どもが私を取り囲み、悪者どもの群れが、私を取り巻き、私の手足を引き裂きました。17 私は、私の骨を、みな数えることができます。彼らは私をながめ、私を見ています。18 彼らは私の着物を互いに分け合い、私の一つの着物を、くじ引きにします。19 【主】よ。あなたは、遠く離れないでください。私の力よ、急いで私を助けてください。20 私のだましさを、剣から救い出してください。私のいのちを、犬の手から。21 私を救ってください。獅子の口から、野牛の角から。あなたは私に答えてくださいます。22 私は、御名を私の兄弟たちに語り告げ、会衆の中で、あなたを賛美しましょう。23 【主】を恐れる人々よ。主を賛美せよ。ヤコブのすべてのすえよ。主をあがめよ。イスラエルのすべてのすえよ。主の前におののけ。24 まことに、主は悩む者の悩みをさげすむことなく、いとうことなく、御顔を隠されもしなかった。むしろ、彼が助けを叫び求めたとき、聞いてくださった。25 大会衆の中での私の賛美はあなたからのものです。私は主を恐れる人々の前で私の誓いを果たします。26 悩む者は、食べて、満ち足り、主を尋ね求める人々は、【主】を賛美しましょう。あなたがたの心が、いつまでも生きるように。27 地の果てもみな、思い起こし、【主】に帰って来るでしょう。また、国々の民もみな、あなたの御前で伏し拝みましょう。28 まことに、王権は【主】のもの。主は国々を統べ治めておられる。29 地の裕福な者もみな、食べて、伏し拝み、ちりに下る者もみな、主の御前に、ひれ伏す。おのれのいのちを保つことのできない人も。30 子孫たちも主に仕え、主のことが、次の世代に語り告げられよう。31 彼らは来て、主のなされた義を、生まれてくる民に告げ知らせよう。」

「わが神、わが神。どうして私をお見捨てになったのですか。」これは、この詩篇の著者であったダビデが苦しみの中であげた、悲痛の叫びでした。具体的にどんな苦しみに遭っていたのかについてはよくわかってはいません。しかし、彼の人生が苦難の連続であったことを私たちはよく知っています。あるとき

は、嫉妬や憎しみに駆られたサウル王から執拗にいのちを狙われることがあり、あるときは、信頼していた者たちからの裏切りに遭い、不当な扱いを受けて虐げられることがあり、あるときは、自分の息子アブシャロムからさえもその身を追われることがありました。この詩篇を記した状況がどのようなものかがはっきりとわからなかったとしても、彼の人生をわかっているだけでも少し振り返ってみれば、そこには数え切れないほどの苦痛や悲しみが存在していました。そして、肉体的にも精神的にも苦しみを味わい、終わりの見えない暗闇の中で、彼は口にしました。「わが神、わが神。どうしてですか。」と。ですから、私たちがこの詩篇22篇を見ていけば、苦しみや試練に置かれるとき、どのような祈りをささげることができるのか、その中でどのようにして希望を見出すことができるのか、そのような大切な真理を私たちは学ぶことができます。たとえ何があろうとも、信頼することのできる神様がどれほど偉大な存在なのかを、ダビデの姿を通してここに見て取ることもできるのです。

でも皆さん、この詩篇はそれがすべてではありません。確かにダビデはここで自分自身の経験を記しています。しかしそれ以上に、彼は預言者として、自分の死後現れるダビデの子イエス・キリストについて、ここで預言していたのです。いやもっと言えば、十字架の上で苦しまれるイエス・キリストの姿に関して、この詩篇22篇全体を通して描いていました。そのことも、これから私たちがみことばを追って行けばよくわかります。ですから、きょうから私たちはこの詩篇を、二つの視点を通して考えてみたいと思います。それぞれダビデとイエス様の視点です。そして、今私は、「きょうから」と言いました。というのも、ほんの昨日まではこの詩篇22篇を一回ですするつもりでしたが、どうしても触れたい場所が多すぎて一つにまとめられませんでした。この詩篇22篇があまりにもすばらしいみことばの一つであるので、時間をとって一緒に考えてみたいと思います。

今読んだときに気づかれた方があるかもしれませんが、この詩篇は大きく、前半部分と後半部分の二つに分けることができます。前半は1-21節のところで、そこには「嘆き」について記されていて、後半は22-31節のところで、そこには「感謝」が記されているのです。詩篇22篇は嘆きから感謝へと変わっていきます。きょうは、その前半の部分である「嘆き」について皆さんとともに考えてみましょう。このみことばが、特に、ひとりひとりが苦しみに遭うときの励ましとなるとともに、救い主イエス・キリストに対する愛と感謝が増し加わる助けとなることを、心から祈っています。

○嘆き：沈黙する神様に対する訴え 1-21節

では、改めて1節から見てください。ダビデはこのように神様に叫んでいました。「1 わが神、わが神。どうして、私をお見捨てになったのですか。遠く離れて私をお救いにならないのですか。私のうめきのことばにも。2 わが神。昼、私は呼びます。しかし、あなたはお答えになりません。夜も、私は黙っていられません。」ダビデはひどい苦しみを抱えていました。彼は自分の信頼する神様から見捨てられたかのように感じ、そのあまりの苦痛のゆえに、昼も夜も黙っていることができませんでした。苦痛の中でうめき続けていたのです。ここで1節の最後に「うめきのことば」という表現が出てきていました。これは大きな痛みや大きな悩みを味わい、悲嘆に暮れている者が発することばを表しています。たとえば、これは、自分の家畜や財産、持ち物、家族や自身の健康さえも失い、激しい痛みを覚えたあのヨブが発したことばでもありました。ヨブ3：24ところにこう出てきます。「**実に、私には食物の代わりに嘆きに来て、私のうめき声は水のようにあふれ出る。**」自分の愛する者も何もかも失った後、ヨブが発したうめき声。それは、私たちには想像もできないほど辛く、また涙にあふれたものだったでしょう。そんなうめき声を、ここでダビデも同じように神様に対して口にしていたのです。また、この箇所ですべてに特に注目して欲しいのは、ダビデが「わが神、わが神。」と叫んでいたことです。どういうことかと言えば、彼は自分がだれに向かって声をあげているのかをよくわかっていたということです。彼は助けを求めている神様が、自分と個人的な関係にあるお方であることを、かつて経験したさまざまな試練から自分自身を力強く救い出してくださったお方であることをよく理解していました。そのことをよく理解していたか

らこそ、彼は、自分が今置かれている状況を理解することができずに混乱していたのです。「一体どうしてですか。」と。「あなたは救いを与えることのできる偉大なお方です。あなただけが私に必要な助けを与えることもできる神様です。かつてあなたは私を助け出してくださいました。それなのになぜ、あなたは私の声に、今、答えてくださらないのですか。」こうしてダビデは、先の見えない暗闇の中でもがき苦しんでいました。

▶キリストの姿① (マタイ27:46)

でも皆さん、このダビデが経験した痛みよりもはるかにまさる苦しみを味わわれた方がおられました。それこそが、主イエス・キリストでした。思い返してみてください。皆さんもよくご存知の通り、十字架にかかれたイエス様は、まさにこの詩篇22:1を引用して叫ばれていました。マタイ27:46を見ればこうあります。「三時ごろ、イエスは大声で、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と叫ばれた。これは、「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。」イエス様が十字架の上でこのように叫ばれていた時、父なる神様と彼との間に何が起こっていたのか、その詳細のすべては、だれにもわかりません。私たちのことばで表現できるものでもありません。しかし言えることは、主イエス・キリストがこの時、十字架の上で、この世のだれも経験したことがないほどの激しい苦しみを味わわれていたということです。この方が神様でなくなった瞬間は一度としてありません。三位一体の神様の間に存在する完全な一致が欠けたこともありませんでした。しかしこの時、イエス様は十字架の上で、父なる神様から引き離され、罪に対する燃える神様の怒りをその身に負われた、ということです。罪の一切ないそのようなお方が、本来であれば私たちが受けるべき神様の怒りの杯を、代わりにすべて飲み干してくださったのです。神のひとり子が私たちの罪のために刺し通され、だれも経験したことがない想像を絶するほどの痛みと苦しみを味わわれたのです。

一体どうしてこのようなことがなされたのでしょうか。パウロはこう言っていました。Ⅱコリント5:21で「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方において、神の義となるためです。」またペテロもこう述べていました。Ⅰペテロ2:24で「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」キリストが十字架の上で死んでくださったわけ、それは、罪のためのなだめの供え物となるためでした。本来であれば、生まれながらに創造主である方に逆らい、神様の忌みきらわれる罪を犯し続けていた私たちが、当然受けるべきその罪の罰を、この方は代わりに受けてくださったのです。私たちがまだ罪人であったときに、キリストが犠牲を払ってみずから進んでその血を流し、この方を信じ受け入れる者に救いを備えてくださいました。キリストの打ち傷のゆえに、この方が私たちのために苦しまれたがゆえに、私たちは今、この方において義と認められたのです。私たちが何かをしたわけではありません。でも、これが、神様が私たちに示してくださった愛でした。だからこそ、私たちが「わが神、わが神。どうして私をお見捨てになったのですか。」という、そのことばを耳にするとき、どれほどの苦しみを主が味わわれたのかということを、決して忘れてはいけません。私たちは主の尊い犠牲によっていやされました。この方が代わりに苦しんでくださったがゆえに、今、私たちは罪の赦しに預かり、神様との交わりを楽しむことができるのです。

●神様の二つの御性質 3-5節

では、詩篇に戻って。ダビデは痛みの中で自分の神様に見捨てられたように感じ、もがいていました。彼のうめきの声は、昼も夜も途絶えることはありませんでした。でもそのような状況にあった彼があることに心を留めるのです。それは、神様の御性質、愛する自分の神様がどのような存在か、ということでした。3節からこのように続いています。3-5節まで、「:3 けれども、あなたは聖であられ、イスラエルの賛美を住まいとしておられます。:4 私たちの先祖は、あなたに信頼しました。彼らは信頼し、あなた

は彼らを助け出されました。:5 彼らはあなたに叫び、彼らは助け出されました。彼らは、あなたに信頼し、彼らは恥を見ませんでした。」ここでダビデは特に、神様の二つの御性質に目を向けていました。

1) 聖さ

まず一つ目に挙げられていたのは、神様の「聖さ」でした。「けれども、あなたは聖であられ」と。神様が聖いお方だということは、この方が正しく罪の一切ない義なる存在であるとの意味ももちろんあります。「聖い」ということばを聞けば、多くの人が真っ先にそんな意味を思い浮かべるかもしれません。それも間違いではありません。でも、この「聖い」ということばには、もともと、「ほかのものと一線を画する」とか、「ほかのものとは異なる唯一の」という意味が含まれています。要するに、神様が聖いというのは、神様がほかの何者とも異なる、ほかの何者とも一線を画す、そのような特別な存在だということです。皆さん、この聖さを考えるときに、神様のほかの御性質と合わせて考えてみてください。たとえば、神様は始まりも終わりもない“決して変わることはない永遠のお方”です。ほかに、そのようなお方はこの世に存在するのでしょうか？存在しません。神様はすべてのことを思いのままにする力がある“全能なるお方”です。ほかにそのようなものが存在するのでしょうか？いいえ存在しません。神様はすべてのことをご存知の“全知のお方”です。すべてを支配されている“主権者なるお方”であり、すべて正しいことを行われる“義なるお方”です。そのような方がほかに存在するのでしょうか？存在しません。どの性質を取ったとしても、この方に並ぶ存在など、この世には一つとして存在しないのです。この方はそのような聖なる神様なのだと。そして、そのような唯一の、ほかとは全く異なる存在に、ダビデは心を留めるのです。この方は人の手によって作られた力のない偶像や、この世のどんなものとも全く異なる偉大な力を持った神様なのだと。この方は聖い神様なのだと。そう心に留めるのです。

2) 誠実さ

また二つ目に彼が覚えていた御性質は、聖さだけではなく、神様の「誠実さ」でした。彼は神様の誠実さにも心を留めるのです。ダビデはここで、かつて自分の先祖たちをどのようにして神様が救い出されたのかを思い起こしていました。このように書いています。「:4 彼らは信頼し、あなたは彼らを助け出されました。:5 彼らはあなたに叫び、彼らは助け出されました。彼らはあなたに信頼し、彼らは恥を見ませんでした。」こうして、彼は自分の状況がひどいものであったとしても、神様の姿がどのようなものを忘れることはありませんでした。どんな時代であろうとも、昔も今も変わることはない忠実な神様の働きに、心を留めようとしたのです。

ここで大切なことは、ダビデは自分自身が苦しみの中で感じていた神様の姿と、自分自身が真理として知っている神様の姿を、対比していたということです。どういうことかと言うと、苦しみの真っ只中にいたダビデは、彼の愛する神様から見捨てられたように感じていました。どんなに叫んでも耳を傾けてくださらない神様が遠く離れているかのように感じていたのです。そんな彼の心に、さまざまな感情が渦巻いていたということは容易に想像することができます。でも、彼はその中で、自分自身が感じていたことに支配されるのではなく、信頼すべき自分の神様がどんな存在か、ということ振り返り、その真理に立とうとしたのです。だからこそ、彼は自分自身に言い聞かせていました。あなたは聖なるお方だと。あなたは以前、ご自身に信頼する者の声を聞き入れて、先祖たちを助け出された、誠実な神様だと。考えてみてください。ときに私たちも、私たちの感情や感じていることのみで心が支配されることがあります。苦難の中にあるときは特にそうかもしれません。痛みが大きければ大きいほど、先が見えなければ見えないほど、私たちは不安や恐れで心が覆われ、神様を見上げるということを忘れてしまうことがあるのです。だからこそ、大切なのは、自分自身が知っている神様の姿を覚えることです。みことばが教えているその真理で心を満たすことです。でもそのようにして、神様を見上げようとするときに、こんな経験をしたことはありません？いつまでも置かれている状況に変化が見られずに、ますま

すその中で苦しみが大きくなれば、自分の内で持っている神様に対する確信が次第に揺らいでくるのです。すばらしい神様がともにいてくださる、だからその神様を見上げなければ…それはわかっているのだけど、問題が依然としてなくなる、どうしよう…。そのように、直面している今の苦しみに心が支配されそうになる思いと、神様の真理に目を向けなければ、向きたいという思い。二つの思いの間にさまざまな葛藤が生じることがあるのです。そんな弱さや不安定なものを、しばしば私たちは覚えることがあります。でも皆さん、それは私たちだけではありません。ダビデ自身もまさに同じことを経験していました。だから6節からこう書いていました。神様の御性質に目を向けた後に、6-8節「:6 しかし、私は虫けらです。人間ではありません。人のそしり、民のさげすみです。:7 私を見る者はみな、私をあざけります。彼らは口をとがらせ、頭を振ります。:8 「【主】に身を任せよ。彼が助け出したらよい。彼に救い出させよ。彼のお気に入りなのだから。」ダビデの状況には変化はありません。いやむしろ、彼はよりひどい苦しみを味わっていました。神様が答えてくださらないばかりか、ダビデは自分を取り囲む敵たちに嘲笑されながら言われていたのです。「【主】に身を任せたらいい。彼に救い出させよ。彼のお気に入りなのだから。」と。ここでダビデの敵たちが「【主】に身をまかせよ。任せたらいい。」そう口にしていたのは、彼を思っただけのアドバイスではなかったことは明らかです。彼らはダビデと神様の関係に疑いを持ち、そして彼をばかにしていました。もし本当にダビデが神様と個人的な関係があるのなら、そこには必ず助けがあるはずだ、これまでを振り返っても、神様はご自身に信頼する者を助け出されてきた。でもその助けが今彼にないということは、その関係は偽りのものに違いない、と彼らは考えていたのです。こうして敵はダビデを責め立てて、彼の心を打ち砕こうとしていました。周りを見渡しても、彼のことを気にかけてくれる存在を見つけることはできませんでした。だから彼は自分のことをこう表現するのです。「私は虫けらです。人間ではありません。」私たちが虫の存在をいちいち気に留めないかのように、彼は、自分の存在がまるで虫のようにだれにとっても価値のないものとして扱われていることを嘆いていました。ダビデはイスラエルの王でもありました。しかし、その彼の存在など気に留めることなく、彼の敵たちは彼をあざけり、そしっていたのです。彼の心には非常に大きな悲しみや痛みがありました。彼はひどい苦しみに遭いました。

▶キリストの姿② (マタイ27:39-40, 43)

でも皆さん、主イエス・キリストが受けられた苦しみはそれ以上のものでした。考えてみてください。彼は神様であり、約束の救い主であったにもかかわらず、人々は十字架にかかる姿を見て、彼を嘲笑していたのです。マタイの27:39-40と43にこのように記されています。「:39 道を行く人々は、頭を振りながらイエスをののしって、:40 言った。「神殿を打ちこわして三日で建てた人よ。もし、神の子なら、自分を救ってみろ。十字架から降りて来い。」…:43 「彼は神により頼んでいる。もし神のお気に入りなら、いま救っていただくがいい。『わたしは神の子だ』と言っているのだから。」と。イエス様の敵は、十字架にかかるその主の姿を見て感謝するのではなく、罵倒していました。彼らは、イエス様ご自身が「神の子である」と言われていたのを、何度も何度も耳にしていました。また、彼らは、主がなされたさまざまな奇跡さえも目の当たりにしていました。でも、それでも彼らはこの方を受け入れることはなく、拒絶し、そしてののしったのです。まさにヨハネが言っていた通りでした。ヨハネ1:11のところこうあります。「この方はご自分のくにに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。」こうしてイエス様の敵は、イエス様をののしました。十字架の上で主が苦しめられていたのは、ほかのだれのためでもない、私たちのような罪人のためでした。しかし彼らはそれを認めるどころか、「自分を救ってみろ」と主を嘲笑したのです。でも皆さん、私たちはその後どうなったかをよく知っています。確かに主は十字架の上で死なれ墓に葬られました。しかし、約束されていた通りに三日目によみがえられました。考えてみてください。神の御子であったイエス様にとって、人々に罵声を浴びせられたときに、十字架から降りて、その者たちを滅ぼすことは容易にできたことでした。その力がなかったわけではあり

ません。その力はありました。しかし、そのようなことは決してなさることはなく、父なる神様のみこころに最後まで忠実に従って、ご自分にではなく、この方を信じるすべての者に救いを備えてくださったのです。この方こそが、罪と死の力に勝利された、約束されていた真の救い主でした。十字架の上でひどく苦しみ、本来であれば決してありえない人々の嘲笑や辱めを受けて、私たちに救いを用意してくださった、これが主の払われた代価であり、これが、主が成し遂げられたみわざだったのです。

詩篇に戻りましょう。これまで見てきたように、ダビデは深い悲しみの中に置かれていました。神様には見捨てられたかのように感じ、周りの敵からはひどい扱いを受けていました。そのような中で、ダビデがしたことはなんだったと思います？それは、変わらず神様を見上げ、その姿に心を留めることでした。彼は自分の心の内を神様の前に素直に打ち明けていたのです。9-10節にこう書いていました。「:9 しかし、あなたは私を母の胎から取り出した方。母の乳房に抛り頼ませた方。:10 生まれる前から、私はあなたに、ゆだねられました。母の胎内にいた時から、あなたは私の神です。」ダビデはここで、自分がこの世に誕生するそれよりも前に、母の胎内にいた頃から、だれが自分とともにいてくださったのかということをお返ししていました。また彼は、生まれた後も、生まれてから今の今に至るまで、自分を養い必要を与えて支えてくださったお方が一体だれなのかを忘れることはありませんでした。ダビデは、ほかのだれでもない神様こそが自分自身の人生におけるすべてを導いてくださった存在だ、ということをよくわかっていたのです。愛する神様こそがすべてのことを支配されている主権者である、ということに思いを巡らせていました。間違いなく、人間的に考えれば、彼の状況ほど厳しいものはありません。どこにも助けを期待できない状態でした。しかし、たとえ状況が変わらず苦しくても、敵がどんなことばであざけろうとも、彼は変わらず主に信頼して、祈りをささげ続けていたのです。私に伝えてくれない神様はもう知りません、何もかも終わりだ…と彼はあきらめることをしませんでした。神様に対する信頼が揺るぐことがなかったからこそ、その神様を見上げてこう訴えるのです。11節続きにこう書いていました。11節「どうか、遠く離れないでください。苦しみが近づいており、助ける者がいないのです。」ダビデは、自分にさらなる試練が迫っていることに気づいていました。だからこそ願うのです。

「神様、お願いですから、私から遠く離れないでください。」彼は自分を助けてくれる者が周りにはおらず、孤独であるということを感じていました。自分自身のうちには迫りくる苦しみを乗り越える力がない、ということもわかっていました。でも同時に、神様のうちにならそれを乗り越える力があると、そこに希望を見出していたのです。こうして彼はへりくだって、自分の心の内を主の前に素直に告白したのです。

これは今の私たちにとっても非常に大切なことです。私たちも日々の歩みの中でさまざまな苦しみに遭い、その中で主がどこか遠くに離れているように感じたり、自分を見捨ててしまったのではないかと感じるたびに、恐れや悲しみに襲われることがあります。言うまでもなく、私たちの心を騒がせ苦しめるような問題は周りに数多くあふれています。予期していなかった病が突然降りかかってくれば、心に大きな不安が生じることもあるでしょう。人間関係の問題もそうですし、愛する者の死や将来に対する不安や、仕事での失敗や、またキリストの信仰のゆえに受けるひどい扱いや…挙げ出せばキリがありません。たくさんの痛みや問題は私たちの周りあふれているのです。では、私たちがそのような状況に置かれたときに、自分の嘆きの声を主が聞いてくださらないかのように感じるたびに、私たちはどのように振る舞っているのでしょうか？一体なぜ主はこの状況を改善してくださらないのだろうか、主に対して憤りを覚えないのでしょうか？どれだけ祈っても自分の思うような変化が見られなければ、すぐに主に対して不平不満や失望を口にしないでしょくか？私の声に耳を傾けてくれない神様なんてもう信頼することができない、と祈ることを諦めないでしょくか？もしそのような悲しみや痛みを覚えている方が今おられるなら、みことばが教えてくれることは、私たちはダビデと同じように、どんなときであろうとも、変わらない神様に自分の抱える思い悩みや問題を打ち明けることができる、ということです。私

たちが主に自分の弱さを口にすること、悲しみや思い悩み、痛みや苦しみを告白することとは、間違っていることではありません。それは別に信仰の弱さを表しているのではありません。私たちはどんな思いであろうとも主の前に正直に持っていき、主にゆだねることができます。みことばもこのように言います。Ⅰペテロ5：6-7「:6 ですから、あなたがたは、神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神が、ちょうど良い時に、あなたがたを高くしてくださるためです。:7 あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。」と。私たちが自分の弱さを認めて主の前にへりくだり、自分の抱えている不安や恐れ、痛み、そういった自分自身の経験しているものを素直に主に打ち明けるなら、私たちの主はそれらを必ず心に留めてくださるのです。この方は私たちを心配してくださるあわれみ深い方ということです。だからこそ皆さん、私たちににとって重要なこと、それは、ダビデがしていたように変わらない神様の姿をいつも覚えて、あきらめることなく祈り続けることです。ダビデの状況に変化は見られていませんでした。しかし、変わらず祈りをささげていました。神様に対してダビデは訴えていました。そして、この方のうちに希望を見出していました。私たちも彼の模範に倣って歩いていくことができます。

こうしてダビデは色々なことを語ってきましたが、続けて自身の経験していた苦しみの詳細について12-18節の中でこのように記していました。「:12 数多い雄牛が、私を取り囲み、バシヤンの強いものが、私を囲みました。:13 彼らは私に向かって、その口を開きました。引き裂きほえたける獅子のように。:14 私は、水のように注ぎだされ、私の骨々はみな、はずれました。私の心は、ろうのようになり、私の内で溶けました。:15 私の力は、土器のかけらのように、かわききり、私の舌は、上あごにくっついていました。あなたは私を死のちりの上に置かれます。:16 犬どもが私を取り囲み、悪者どもの群れが、私を取り巻き、私の手足を引き裂きました。:17 私は、私の骨を、みな数えることができます。彼らは私をながめ、私を見ています。:18 彼らは私の着物を互いに分け合い、私の一つの着物を、くじ引きにします。」

●ダビデのいのちを脅かす敵の姿 12-18節

まず、ここで見て取ることができるのは、ダビデが自分のいのちを脅かしていた強大な力を持った敵を、動物に例えて描写しているということです。三つの動物がここに登場していました。

a) 雄牛、バシヤンの強いもの・・・まず初めに出てきていたのは、12節にあるように「雄牛、…バシヤンの強いもの」でした。この「バシヤン」というのは、現在のシリアの南西部、ガリラヤ湖の東にあたる地域のことです。そこには非常に肥えた土地があることで有名でした。多くの小麦などがそこで実って、その地域で育てられている家畜たちは非常によく養われていたのです。聖書の中にもこのようなことが言われています。エゼキエル39：18に「勇志たちの肉を食べ、国の君主たちの血を飲め。雄羊、子羊、雄やぎ、雄牛、すべてのバシヤンの肥えたものをそうせよ。」と。ですから、「バシヤンの強いもの」とまで呼ばれる雄牛は、非常によく肥えて大きく力強いもののことを象徴していたのです。そのようなものによってダビデは周りを取り囲まれていました。

b) 獅子・・・次に13節に出てきたのは、「獅子」でした。いうまでもなく大きな力を象徴するものでした。そして、そんな獅子がまるで獲物を狙うかのようにうなり声をあげて、口を開けて今にも引き裂こうと、ダビデにじりじりと迫っていたのです。敵は間近に迫っていて、彼はもうそこから逃げることなどできないような絶望的に思える状況にありました。

c) 犬・・・そしてもう一つ出てくる動物は16節に書かれていた「犬」でした。もちろんこの「犬」というのは、今の私たちがペットとして飼うようなかわいいものを表しているのではありません。この当時の犬というのは、おもに野生で暮らしていて狡猾で非常に凶暴な存在として知られていたのです。そんな犬どもにダビデは取り囲まれていました。彼にはもうどこにも逃げ場などありませんでした。いのちを脅かす危機的状況に陥っていたのです。だから、彼は自分の状態をこのように言い表していました。14節で、「私は、水のように注ぎ出され、私の骨々はみなはずれました。私の心は、ろうのようになり、

私の内で溶けました。」ここで比喩的な表現が用いられていたのですが、ダビデが何を言わんとしたのか想像できません？彼は水のように注ぎ出されていきました。要するに、彼の内にはもう何も残っていないほど、すべてのものが失われてしまったと感じていたということです。力も体力も彼の内にはもう何一つ残っていませんでした。からだは弱り切って疲れ果てていたのです。また単にからだは疲れ果てただけではありません。彼の骨はみなはずれてしまったという風にもありました。言い換えれば、まるでからだの骨がすべてはずれたかのように、彼のからだは激しい痛みを覚えていたということです。そしてダビデのからだは弱り切っていて、激しい痛みを覚えていただけでなく、その心も、ろうのようになり、溶けてしまったと。つまり、肉体的にだけでなく心も疲れきったダビデは、その苦しみの中で今にも消えてしまいそうになっていたということです。彼の内には、もう敵と戦う気力すら残されていませんでした。こうして強大な敵に囲まれてすべてを出し尽くした彼は、もうかわききっていました。だからこんな表現が15節に続いています。「私の力は、土器のかけらのように、かわききり、私の舌は、上あごにくっついていて、あなたは私を死のちりの上に置かれます。」もちろん、今の私たちは、ダビデが苦しみに遭うたびに、そこに神様の助けが必ずあったということをよく知っています。ダビデはさまざまな試練を生涯において経験したのですが、それらによって、彼が実際にいのちを取られることはありませんでした。しかしここでは、自分に降りかかるあまりの苦しみのゆえに、まるで自分が死のちりの上に置かれ、すでに死んでしまったかのように描いていたのです。それほどまでに、彼は肉体的にも精神的にもそのすべてにおいて追い詰められていました。そして、そのように弱りきったダビデを、彼の敵たちは放っておきません。彼らはダビデの苦しみを周りから眺めそして嘲笑するのです。17、18節を見ればこのように記されています。「:17 私は、私の骨を、みな数えることができます。彼らは私をながめ、私を見ています。:18 彼らは私の着物を互いに分け合い、私の一つの着物を、くじ引きにします。」苦痛にあえいで、もう抵抗する力も何も残されていなかったダビデは、周りに集う敵からの辱めを、為す術なくただ一身に受けていました。もう何もできないそんな苦しみの中に彼はいたのです。

▶キリストの姿③ (ヨハネ19:23-24)

でも皆さん、この苦しみのダビデ以上に味わわれたのが、まさにイエス・キリストでした。思い返してみてください。主は十字架の上で激しい苦痛を味わった後、その中で、のどのかわきを覚えておられました。また、十字架につけた兵士たちがイエス様にしたことがヨハネ19:23-24に書いてあります。「:23 さて、兵士たちは、イエスを十字架につけると、イエスの着物を取り、ひとりの兵士に一つずつあたるよう四分した。また下着をも取ったが、それは上から全部一つに織った、縫い目なしのものであった。:24 そこで彼らは互いに言った。「それは裂かないで、だれの物になるか、くじを引こう。」それは、「彼らはわたしの着物を分け合い、わたしの下着のためにくじを引いた」という聖書が成就するためであった。」まさにこの詩篇22篇に記されていた預言が、ここで成就したのです。神様のみこころが確かに成し遂げられました。でも皆さん、同時に私たちが覚えなければいけないこと、それは、どれほどの苦しみを主は私やあなたのために味わわれたのか、ということです。イエス・キリストは病気で苦しむ人の病をいやし、嵐をしずめる力を持った、そのような偉大な神様でした。この世界を創造し支配しておられる、そのような主権者でした。しかし、そのお方があまりの苦しみのゆえに、かわきを覚えられたのです。十字架を取り囲む人々からあざけられ辱めを受けたのです。何度も何度も鞭打たれ十字架につけられた彼のからだは、激しい痛みによって弱り切っていました。そして、そのお方が父なる神様からも見捨てられ、その身にすべての罪を背負って死なれたのです。一体、この主はどれほどの犠牲を払われたのでしょうか？一体、この方はどれほどへりくだって私たちのために苦しみを受けてくださったのでしょうか？一体、この方はどれほどの代価を私たちのために支払ってくださったのでしょうか？はたして、これほどまでにすばらしいみわざを成し遂げられたイエス・キリストのほかに、私たちにとって重要なものなど存在するのでしょうか？そしてもし、私たちがこのすばらしい主の十字架のみわざを知っているのだとすれば、

この方の愛を、この方の犠牲のすばらしさを私たちが覚えているのだとすれば、その私たちが示す愛や犠牲は一体どんなものでしょうか？もし、まだこの主イエス・キリストを自分自身の救い主として知らない方がおられるなら、どうかきょうこのすばらしい知らせを自分のものとしてください。生まれながらの私たちはみな、神様に逆らい、永遠のさばきを地獄で受けるべき存在でした。例外はひとりとしていません。すべての者が、罪に対して燃え上がる神様の怒りにのみ値する存在でした。しかし、本来であれば私たちに注がれるべき神様の怒り、罪の罰を、イエス・キリストは十字架の上で私たちの代わりとなって受けてくださったのです。私たちがそれに値するようすばらしい人物だったわけではありません。私たちは何の価値もない罪人でした。主がこのように成してくださったこと、それはただ神様のあわれみ、ただ神様の愛でしかありません。だからこそ、どうかきょうまだ機会があるときに、この方を自分の罪のために死んでくださった救い主だと信じ受け入れ、罪を悔い改めて、このようすばらしい方のために生きる人生を始めてください。

そして最後、多くの苦しみを味わって神様に見捨てられたかのように感じていたダビデは、このように前半部分を締めくくっていました。19-21節最後にこう記されています。「:19 【主】よ。あなたは、遠く離れないでください。私の力よ、急いで私を助けてください。:20 私のたましいを、剣から救い出してください。私のいのちを、犬の手から。:21 私を救ってください。獅子の口から、野牛の角から。あなたは私に答えてくださいます。」ダビデはここでも同じ願いを口にしていました。「遠く離れないでください。」彼の神様に対する信仰は、最初から変わることはありませんでした。彼にとって重要だったことは、苦しみに対する答えを神様が与えてくださることではなく、ただ主がともにいて、彼を助けてくださることだけでした。凄いなと思いませんか？一体ダビデはどれほど、自分にとって神様だけが十分な存在だ、と信頼していたのでしょうか？彼が経験していた苦しみは私たちの想像を絶するものでした。しかし彼の確信は、最初から最後まで変わることはなかったのです。彼自身の内には、迫り来る雄牛や獅子、犬の攻撃を防ぐ手段などはありませんでした。彼は自分が無力だということを知っていたのです。でも、神様が答えてくださるなら、自分にはどうすることもできない状況から神様は必ず助け出してくださる、とそう確信していたのです。その確信は次週見ますが、後半部分を見ていけば、現実のものになることを私たちは見て取ることができます。沈黙されていた神様が彼の叫びに応えられたことで、彼の嘆きや苦しみは、感謝や賛美へと変わっていきます。すばらしい喜びを私たちはこの後半部分に見て取ることができます。それは来週のお楽しみです。

〇まとめ

きょう、私たちが学んできたこの前半部分でも、確かにさまざまな苦しみや悲しみ、痛みや恐れや不安などがありました。その中でも、私たちは大きな励ましを見出すことができたはず。ダビデの姿を通して、たとえどんな状況に陥ることがあろうとも、私たちは変わらずに主を見上げ続けるということ、そこに希望があること、そこに喜びがあることを見て取ることができました。でもそれ以上に、私たちの愛する主がどれほど大きな苦しみを十字架の上で受けられたのかということも考えることができました。マシュー・ヘンリー牧師は、キリストの十字架での苦しみとその犠牲を覚えるときに、こんなことばを残していました。「このことが、真のメシヤとしてのキリストへの信仰を確かなものとし、私たちが愛し、私たちのために苦しみを受けてくださった方を、最高の友として愛する気持ちをかきたてるのだ。」と。イエス・キリストがどれほど大きな犠牲を払ってくださったのか、どれほどの苦しみを味わわれたのかを覚えるときに、この方に対する愛が、この方に対する感謝が心の内に増し加わってくるのだと。私たちがキリストの十字架を覚えるときに、この方がどれほどの苦しみを味わわれたのかということを知るときに、はたして、私たちの内には、この方を愛する思いが増し加わっているのでしょうか？“主はすばらしいみわざをなされた”そのことに心を留め、このすばらしい主のために今週も喜んで仕えていきましょう。